

【音更】J Aおとふけは9日午前9時から同J Aで理事会を開き、8日の総代会で退任した笠井安弘組合長(70)に代わる新組合長に、専務の土田純雄氏(63)を互選した。任期は3年間。

土田氏は1959年、音更町生まれ。帯広農業高卒。78年に就農し、同J Aでは2007年から理事を5期、13年から専務を務めていた。土田氏は「農業を取り巻くコスト高の現状を打破し、組合員の所得確保の支援に力を尽くしたい」と抱負を語った。

土田氏の後任の専務には理事の菅原博氏(54)を選任した。

その他の主な役員は次の通り。(敬称略)

- ▽常務理事＝高川清美(新)
- ▽筆頭理事＝中嶋康裕(新)
- ▽代表監事＝河田敬貴(新)
- ▽常勤監事＝木下幸俊(再、員外)



土田純雄氏

【清水】J A十勝清水町(氷見隆雄組合長、組合員446人)の総会が8日、同J Aで開かれた。2021年度の農畜産物取扱販売高は、小麦やビートの収量が伸びたことなどから過去最高の329億3,100万円(前年度比4.2%増)となった。

本人20人、書面議決314人など335人が出席した。

21年度の部門別取扱販売高は、主力の酪農・畜産物では生乳生産量が夏の猛暑で一時減少したが、年間を通しては前年度を上回り、前年度比1.9%増の14万8,644トン、販売高は0.2%減の135億8,200万円。畜産は肉用牛の取扱頭数が4.8%増の2万9,496頭と伸び、7.4%増の93億9,800万円だった。

農産物は、ジャガイモの生産は平年を下回ったが、小麦やビートが好調で13.3%増の74億7,000万円だった。経常利益は24.6%増の3億3,036万円を確保。当期末処分剰余金は3億1,488万円。

氷見組合長は「地域農業振興中長期計画に基づき、組合員との対話を大切にして持続可能な農業を構築していく」とあいさつした。

J A帯広かわにし(有塚利宣組合長、正組合員746人)の通常総代会が10日午前、帯広市内の同J A本所で開かれた。2021年度の農業生産額は、前年度比4.2%増の221億1,731万円です過去最高を更新。多くの農作物で平年作を上回る作柄となり、酪農・畜産も堅調に推移した。

農作物は、6、7月の干ばつで一部に収量減、品質低下の影響はあったが、全体的には作柄に恵まれた。部門別の生産額は、小麦が22%増の36億9,874万円、ビートは平均糖分が16.4%だったものの反収(10アール当たりの収量)は過去最高で生産額は13.6%増の22億1,774万円だった。豆類は5.7%増の18億5,259万円、ジャガイモは2.8%減の21億4,270万円となった。

生乳販売は、規模拡大や良質な粗飼料が確保できて増産基調となり、4.9%増の35億3,295万円。コロナ禍で肉用牛や乳用牛の個体販売は前年並みだったが、畜産の合

計は1.4%増の89億5,737万円となった。

生産額の合計は、2019年度の214億円を抜いて過去最高。事業全体の経常利益は9億738万円を計上、当期末処分剰余金は8億5,715万円だった。

総代182人のうち書面を中心に180人が出席。開会あいさつで有塚組合長は、昨年作柄や農業を取り巻く環境に触れながら、「史上最高の成果が実現できたのは組合員の皆さんと家族の努力のおかげ。食料安保の頼りは農業であり、先導役の十勝や川西農協への期待は大きい。人智を尽くして一層取り組む」と述べた。